

『誰にも言えない、私だけの秘密』  
(お試し版)

\*\*\*

坂鏡美髪（さかかがみかみ）はどこにでもいるごく普通の女子高生だった。と、言うとなんだかアニメやマンガのヒロインのような感じになってしまいが、しかし本当のところ、坂鏡さんを表す言葉にこれほどピッタリなものはない。

坂鏡さんは朝が早いようで、私が学校に着く頃にはいつだって教室にいて、読書をしている。どうやらミステリーが好みらしく、盗み見る表紙からは、私でも知っているくらい有名な国内ミステリー作家の名前が窺えることが多い。本なんて何が面白いんだろう？ 私が見る物語と言えばテレビで放送しているドラマか、電通が必死に宣伝している派手なB級アクション映画くらいだ。夏休みの読書感想文の宿題の時くらいにしか読書をするのではない私にとって、毎日のように違う本を開いている坂鏡さんのような人間は、まさに違う次元の住人のように思えた。

教室の中でひとり、静かに読書をしている彼女の姿は、まるで周りを寄せ付けないための壁を作っているかのようだった。本を読んでいる時は話しかけるな、そういうオーラのようなものを坂鏡さんは出しているのだと私は思う。クラス中、男女関係なく、そういうものを皆が感じていただろう。

友達は、いない。

いつもひとりだ。

当然といえば、当然。こういう態度の人間は一クラスに必ずといっていいほど存在するが、このタイプの人間が他人から好かれていという話は聞いたことがない。坂鏡さんもその例に漏れることはなかった。

でも、私は――

坂鏡さんにとても魅力を感じていた。

惹きつけられている。

魅了される。

彼女は何かが違う、そういう直感のようなものがあつた。

なんと表現すればよいのだろう。

坂鏡さんは――とても儂い。そんな印象を常に私に与える。

触れれば砕けてしまいそうな華奢な体躯に、キメの細かいロングの黒髪。その髪の毛からは、いつも柑橘系のシャンプールの香りがする。

坂鏡さんが発する言葉は、いまにも消えてしまうのではないかと心配してしまうほどの、なんとも弱々しいものだ。彼女が何かを喋る時、教室は無言になる。そうしなければ、何も聞かないからだ。私はその瞬間が身震いするほど好きだ。教室を坂鏡さんの声が支配する。そういう時、私は自分の席で、顔をほころばせる。周りから見られないようにノートで顔を隠しながら、だ。坂鏡さんの声は耳触りが良くとても居心地がよい。まるで声が私を包み込んでクシ

ヤクシヤに丸められてしまうのではないかと時々怖くなることもある。

彼女が体調の不良を理由に、体育の授業を毎回見学していることも、坂鏡さんの儂さをより増長させる要素のひとつだろう。彼女の容姿や言動によって、私の五感は恥ずかしいくらいに刺激されてしまうのだ。

これはひどく陳腐な表現だが、彼女の一挙手一投足を眺めていることが、まさに私の学校生活における幸せであったといっても決して過言ではない。

と、これが去年までの坂鏡さんだ。

今年になってから、坂鏡さんはクラスでイジメをうけることとなった。

2010年 3月14日（日）初版発行

2010年 5月4日（火）第二版発行

発行元 足ぐれの使い魔

著者 ashikure\_U1

ホームページ 「<http://ashikure.3rin.net>」

ブログ 「<http://ameblo.jp/ashikure-no-tsukaima/>」

Twitter 「[http://twitter.com/ashikure\\_U1](http://twitter.com/ashikure_U1)」

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

